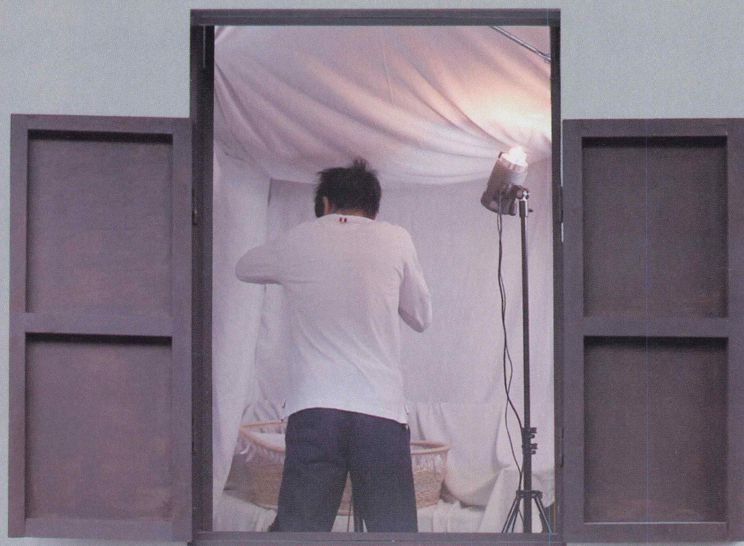


相手の気持ちがわかってしまった 自分の気持ちがうつってしまった――



小山駿助監督作品

初イニ

最愛の人の死を、どう受け止めるのか

澤田栄一 小山駿助 橋口勇輝 武田知久 白石花子 竹田邦彦 細山萌子 中村安那

脚本・絵コンテ・編集：小山駿助 撮影：高階 匠 照明：迫田遼亮 録音：澤田栄一 メイク：細山萌子 衣装：細山貴之 美術：田幸 翔 音楽：中村太紀 助監督：田幸 翔／遠 真平
プロデューサー：田幸 翔／細山萌子／角田智之 配給宣伝：ムービー・アクト・プロジェクト 配給協力：ミカタ・エンタテインメント

小山駿助という驚くべき個性を発見してもらいたい。
ゆらりとした歩き姿と呪文のようなつぶやきを持つ俳優として、
シンプルな設定を最大限に展開させるストーリーテラーとして、
そして鋭利な美学を備えた映画作家として、
小山監督が未来の日本映画界に
鮮烈なインパクトをもたらすことを確信している。

—— 矢田部吉彦（前東京国際映画祭ディレクター）

冒頭から続く白く、生成りの色に作られた画面。
その中に生きる主人公もまだ染まらない、生地そのままのままでいて、
今からなにかの色を選ぼうとしている。生成り色で語られる物語が、
こんなにも緊張感をはらんでゆこうとは。

—— 片渕須直（アニメーション映画監督『この世界の（さらにはいくつかの）片隅に』）

初めて任された仕事は、赤ん坊の遺体撮影だった——。
若きカメラマンと依頼主の父親。奇妙な交流で綴られる、喪失と再生の物語。

写真機が発明された時代、遺体を写すという行為が世界各地で発生した——。本作は、監督・主演を務めた小山駿助が上記の歴史的事実に触れたことから企画が始まった。現代の日本で、そのような切実な必要性を持つとしたら、それはどのような人物か。また、そのような絶望に打ちひしがれている人間に相対した場合、私たちにはどのようなことが可能なのか。

出演は、日本映画として46年ぶりのカンヌ国際映画祭短編部門出品作となった『ふたつのウーテル』主演の澤田栄一。話題となった短編映画『viewers:1』主演、ブルドッキングヘッドロックの橋口勇輝、文学座の武田知久、劇団晴天の白石花子。

最愛の人の死とどう向き合うかという問題に端を発し、やがては現代を生きる若者が世界と格闘する姿を繊細に、しかし力強くスクリーンに映し出す。社会が災厄に見舞われるこの時代においても、映画はなお量産され続けている。その大河の如き本数の中の一本として小さな光を放つこの映画を、是非自身の目で発見し楽しんで頂きたい。



7/2(土) → 7/15(金)



当日券:1,800円 前売り券:1,400円
トークイベントあり(予定)。イベント詳細は公式サイト・SNSにて。
<https://www.hatsu-shigoto.com> @firstjob8

新宿 K's cinema

東京都新宿区新宿3丁目35-13 3F
03-3352-2471 <https://www.ks-cinema.com/>
全席指定・定員入替制

